王朝文芸の宗教的史観 (一)

源氏物語の浄土教様式

村田　昇

(一) 源氏物語と観無量寿経

私は親鸞の信者として、浄土の三部経を拝読し、宗教的崇高の醍醐味を味ってきた。又、青年時代から幾遍も源氏物語を熱読して、悲劇的崇高を描いていることに気づいた。そしてその源泉が、三部経の一、観経（略称）にあるのではないかと直観した。その自信を確にしえたのは、西三条実隆の「明星抄」の左の文であった。

爰に不審をかくる人あり。此物語はことごとく好色淫乱の風也。何とて仁義五常を備ふべき哉と、是道をしらざる人の一隅の管見なり。……経教の中にも提婆が五逆、又仁王経に九百九十九王のくびをきらんとせし事、又阿闍世太子の父王を籠者し、母を害せんとせし事も、末法の群生を戒めんため也。好色淫風の事をのせて……終には中道実相の悟におとし入べき方便の権教也。

私の「美」心を開眼させたのは、浄土の教を求め浄土の尊さを教えた「信」であった。私はこれによって、日本文芸美を発見し創造する慧眼を自得した。私には**「信」と「美」が一如**である。この一如観がない者には、仏教の世界観によって美の殿堂を建立している日本文芸の秘密に参ずることは不可能であろう。**私に日本文芸美学を構想せしめるものは、「信」と「美」の一如観**である。この論文を書かせた力も亦「信」と「美」の一如観であった。

補説　無常・罪悪等人間実存に即して、苦修練行・上求菩提・下化衆生を理想とする仏教は悲劇精神である。

王舎城の悲劇　日本文芸で観経の影響を最も多く受けたのは源氏物語である。観経が無かったら源氏物語は生れなかったといいえられる。賢木巻には「律師のいと尊き声にて、「念仏衆生摂取不捨」とうち述べて」と観経真身観を引く。

この句は「往生要集」「雑想観」にも引かれている。初音巻に「蓮のなかの世界に、まだ開けざらむ心ちも、かくや」とあるのは、観経の

生彼宮殿。寿五百歳。常不見仏。不聞経法。不見菩薩。声聞聚。是故於彼国土。謂之胎生。其胎生者。皆無智慧。於五百歳中。常不見仏。不聞経法。不見菩薩。諸声聞衆。無由供養於仏

不知菩薩法式。不得修習功徳。当知此人。宿生之時。無有智慧。疑惑所致。

七宝池中。蓮華之内。経於六劫。蓮華乃敷。当華敷時。観世音。大勢至。以梵音声。安慰彼人。為説大乗。甚深経典。聞此法已。応時即発。無上道心。

から学んだと考えられる。

尚池田亀鑑編「源氏物語事典下巻」には、広く源氏物語注釈書が引用する仏典をあげている。それによると最も多い法華経二十回に次ぐものは、観経の七回である。紫式部はこの観経の句を、観経から直接得たか、往生要集をみて知ったかが問題であるが、双方から学んだとも考えられる。又、今昔物語巻十五に観経王舎城の悲劇が書かれてあるから、説経師から聴いたかもしれない。「人はとはいうとも、かくいふとも、ただ阿弥陀仏にたゆみなく経をならひはべらん」（紫式部日記）というひたむきな求道心がこれを証する。然らば浄土教勧誘の師は誰か。四辻善成の「河海抄」（一三六七）には「式部は檀那院（補）、贈僧正の許可をかうふりて、天台一心三観の血脈にいれり。」と記した。善成は何を証拠に記したのか。それが不明な限り、肯定できぬ。

補　天台宗。檀那流の祖。京都の人。藤原貞雅の子。世に檀那僧都。また檀那僧正と称す。慈慧僧正に師事して天台教を学び、叡山東塔幸谷の檀那院に住し、源信僧都と声誉相並ぶ。又池上の皇慶に灌頂をうけ、其玄奥に達す。一条天皇の寵を受け、屢々参内して法を説く、権大僧都に任じ、寛弘四年（一〇〇七）五十五歳寂。勅して僧正を贈る。後世その法流を檀那流と称し、源信の慧心流と共に、日本天台教学の二大学派たり。著書に草木成仏論等あり。（宇井伯爵、仏教辞典）

源信は唐の善導に発した浄土教の日本始祖である。浄土教は庶民済度を宗旨とし、且源信が芸術を助縁としていた為に、広く大衆一般に信者が多かったから、紫式部が宮中において又横川に参詣して源信に会ひ且説法を聴聞したと考えられ、「往生要集」は勿論熱読したと信じてよい。こうしたことを裏書するものは、源氏物語宇治十帖の記事である。「手習巻」に忽然として現われる「横川のなにがし僧都」を、源信とすることは、学界の定説である。以下僧都・母・妹の出る個所を抄出してみよう。

その頃、横川に、なにがし僧都とかいひて、いと尊き人住みけり。八十余りの母、五十ばかりの妹ありけり。

この僧都の母が、長谷詣の帰途発病し、僧都は横川より下山して、宇治の院に宿った。僧都がここで怪とみたのは、遺棄された浮舟の意識を失った瀕死の病体であった。これを僧都の妹尼が介抱する。これから源氏物語の最終巻夢浮橋巻まで、僧都と浮舟の仏縁は続く。「橋姫巻」の八宮の邸宅は、現存の宇治上神社、宇治神社所存地にあって、その隣に、北村季吟が地誌「蒐芸泥赴（つぎねふ）」の「恵心院」の項に「離宮（宇治神社）の北に在り、源信僧都の開基本尊は弥陀即この僧都の作といへり、源、姓は卜部……名をのがれて横川に隠居し給ふ。よりて横川僧都といふ。恵心僧都是也」とある恵心院が現存していて、源信と宇治の因縁が深かったことを証している。源信は大和葛木の生れであるから、彼ら一家人が宇治を度々往還したであろうことも勘考せねばならぬ。

ここにおいて吾々学徒に現われた研究問題は、㈠宇治十帖の仏教情調、㈡女人往生と源氏物語、㈢浮舟還俗非還俗論、㈣長恨歌と源氏物語、㈤夢浮橋の美学の五項である。改めていう。善導の浄土教は、観経中心であった。源信はこれを信じ、その主著は「往生要集」である。「往生要集」がなかったら、源信、善導が出なかったら観経が無かったら源氏物語は生れなかったのである。

補　親鸞は「教行信証」の総序に、「浄邦縁熟して、調達闍世をして逆害を興ぜしむ。浄業機彰して、釈迦韋提をして安養を選ばしめたまへり。斯れ乃ち、権化の仁、斉しく苦悩の萠を救済し、世雄の悲、正しく逆・謗・闡提を恵まんと欲す」といった。この論法を借って、観経の五舎城の悲劇が、紫式部をして源氏物語を書かせたともいいうる。こうした処から、紫式部は観音菩薩の化身であるという伝説も生れたのである。

釈尊在世当時、中印度王舎城に頻婆娑羅王という勇猛な王がいた。日本の秀吉の如く、鄙賤より身を起して、中印度の大王となったが、五十の坂を越しても子がなかった。ある時一人の大臣は、王に次のようなことを申し出た。「この国のさる渓谷に一人の波羅門が修行しています。今四年経つと立派に菩提を成就して死んでゆきます。その時初めて王妃は妊娠せられるでしょう」と。

その頃の印度には、一人の出生は別の一人が死んで再生するものと信じられていた。王はその四年後が待ち遠しさに、その苦行中の波羅門を捕へ惨殺して命を奪った。その時から王妃は妊んだ。波羅門はこの非業の死を哭して、再生の後必ず大王に復讐すると呪って斃れた。月日経って生れた子は、夫婦の間に待ちに待った愛し子であると共に、己の生命をねらう仇敵である。実に深刻なこの運命は、光源氏の子を生み落した藤壷の苦悶であり、帝王の妃に通じた光源氏の苦衷である。又その大罪の報ひとして、愛妻女三の宮を柏木に奪はれ、その所生の子薫を、不義の子と知りつつも、我が子として愛さねばならぬ光源氏の姿である。ここに頻婆娑羅王に似た光源氏があり、王妃韋提希夫人に似た藤壷、女三の宮がある。生誕した王子は阿闍世という名で呼ばれた。阿闍世とは未生怨と訳されている。生れざる以前より親を怨まねばならぬ宿業におかれたことを意味している。王妃は我子が夫婦の命をねらう宿敵であると聞いて、襁褓の中に殺害を計ったが、殺害し損じて手の小指のみをそいだ。阿闍世は物心ついて、手の小指のないことに気付き、その理由を何心なく母に尋ねた。その瞬間母の表情は実に深刻な隠険な相に変った。その瞳に嘗つての慈母にみたことのない冷厳なものをよんだ。さうして何もいはず潸然と涙するのみであった。そこで阿闍世は嘗つて、小指の損した理由を、近侍の女からささやかれていたから、自分の闇い運命を深く疑った。

これまでの記述は、観経にはなく、善導の「観経疏」にある。「観経疏」は「大般若経」「未生怨経」等に據っている。右は私の和訳である。

源氏物語の冷泉院は、法務の僧都から己の父が、今は臣下である光源氏であることをきかされて、

いよいよ御学問をせさせ給ひつつ、さまざまの書どもを御覧ずるに、唐土は顕はれても忍びても、乱りがはしき事いと多かりけり。日本には更に御覧じ得る所なし。たとひあらむにても、かや

うに忍びたりけむ事をば、いかでか伝へ知るやうのあらむとする。一世の源氏、また納言、大臣になりて後に、更に親王にもなり位にも即き給へるも、数多例ありけり。人がらの賢きにこと寄せてさもや譲り聞えてましなど、よろづにぞ思しける。（薄雲）と煩悶し、遂に譲位せられた。薫の場合は、それよりも更に深刻である。

幼心地にもほの聞き給ひし事の、折々いぶかしう覚束なく思ひ渡れど、問ふべき人もなし。世と共に心にかけて、いかなりける事にかは、何の契にてかう安からぬ思添ひたる身にしもなり出でけむ。（匂宮）

とあって、橋姫の巻で宇治の姫君の侍女から、己の暗い生をきき父母の秘密を知って、「かかる事世に又あらむやと、心一つにいとど物思はしさ添ひて、内に参らむと思しつるも、出で立たれず」（橋姫）と嘆くのである。阿闍世に直接にはっきりと、その不具の身体の秘密を知らせたのは、釈尊の従弟であり且法敵である提婆達多であった。提婆は出家して神通を学び、身に三十相を具し、六万の法蔵を誦したが、利養の為に三逆罪を作り、生き乍ら地獄に堕ちたといわれた悪人である。

太子よ。太子は生れ乍らにして、父母の恐ろしい敵である。母后は太子がその腹に宿られる時から、いかにして太子の命を断たんかと苦心せられた。そして太子を生まれる時、下に刀刃の林を作り、高殿よりその刀刃中に、生み落された。然し幸福にも太子のお命は助かった。その堕落遊ばす途中、刃に触れてたちきられたのが、左の小指である。

と、事こまかに提婆提多から己の宿業を説明されてから、阿闍世の性格は、父母を怨まねばならぬ不幸な運命の為に暗い性格に変る。この運命と性格が、源氏物語の薫にでている。その後、太子は父を七重の牢に幽閉して惨殺した。続いて母をも幽閉した。源氏物語には、も一つ愛欲煩悩に因る家庭悲劇がある。それは光源氏の正妻女三の宮を青年柏木が姦淫密通し、為に女三の宮は光源氏の憎しみの加わることを畏れ、わが宿業を恨めしく思って、尼になった。その後夜の加持に、六條御息所の怨霊が現われ、昔光源氏の愛妻紫上も怨み殺さうとしたが、祈禱の法力に破れて生きかえった。（若菜下）然し女三の宮は尼にすることができたと嘲笑した。柏木は光源氏の憤りを恐れる余り病床に臥し重態となり、若き日より高い理想をもち乍らその望みも達せず、宿命のつたなさを嘆きつつ悶死していった。薫は自分の出生について幼心地に薄々聞いた事が、成人するにつれて時折不審に思われるが、その真相を聞くべき人もいない。只母宮出家の動機が思いやられ、亡き柏木もゆかしく感ぜられて、早くから出家したいとの望みを抱いている。二十二歳の頃故柏木の乳母の娘で、弁のおもとと名のる老女から、光源氏の子ではなく、母宮と亡き柏木の不義の子であることを聞いて、宿業の恐しさに戦くのであった。これは頻婆娑羅王から闇殺された仙人の怨霊の再生である吾子阿闍世から、報復獄殺された頻婆娑羅王の応報の相を学んでいる。桐壷帝が吾子光源氏の大不孝者であることを知らず益々これを愛したのは、頻婆娑羅王が、幼時において吾子阿闍世の殺意を知らずしてこれを愛せしに等しく、又悪子より牢獄に投ぜられて尚その改心を祈り、獄殺されて尚吾子の懺悔を祈ったことは、柏木の

罪に対する光源氏の態度と対比的である。宇治十帖の宗教的世界の攪乱者である匂宮は、釈迦の従弟であって釈迦教団の破壊者提婆達多によって造型されてある。柏木には悪虐な阿闍世の俤があり、薫には懺悔後の阿闍世の相が窺われる。女三の宮が、薫から人間に生命を恩み給うた母上として、敬愛感謝されえない宿業は、韋提希夫人と同じかなしみがこめられてある。一方薫が生みの父柏木、母女三の宮を「なぜに生んだのか」と怨むのは、阿闍世の心境である。而して最後の女人浮舟には、韋提希夫人の悲劇的生涯が象徴されている。最初に描かれた人も桐壷更衣と称する薄命の女人であった。この女人構想の意義は重大である。「観経」には、韋提希夫人が、世尊釈迦を見奉り、自ら瓔珞を絶ち、挙身投地し号泣して、仏に向って、

「世尊、我宿何の罪ありてか此の悪子を生ぜる、世尊、復何等の因縁有りてか提婆達多と共に眷属為る。

我、今極楽世界の阿弥陀仏の所に生れんと楽ふ。唯願はくは、世尊、我に思惟を教へ、我に正愛を教へたまへ。

と訴え、聞信して歓喜した。

歓喜に住したということは、死を待たずして現世において既に不退転の菩薩と成って往生決定の正定聚位に住し、娑婆即寂光土と歓喜しているのであって、これを宗旨としたのは親鸞であって、源信はまだそこに達していない。

桐壷帝が罪悪の子光源氏を咎めず愛しているように、頻婆娑羅王の霊は、阿闍世太子を身心の苦悩を大悲して、釈尊の教法に会わせたことによって、阿闍世は懺悔し大信心を起し、釈迦教団の護持者となって、多くの国民を仏教に導いた。（大般涅槃経第二）柏木が悶死した如く、提婆達多の居る大地は自ずと沈み炎と燃え上り、忽ち膝を埋め、臍に及び、肩に及んだ。彼は火に焼かれて、我が逆罪を悔い南無仏と叫びながら沈んだ。この時二つの金挺は彼を前後に挾み、そのまま燃え盛る大地に捲き込み、無間地獄に引き込んだ。（増一阿含四九品九経）

吾々はこれを王舎城の悲劇という。人間の行動のすべてをあげて生から排除しょうとする混乱と分裂と失権の苦悩を如実に描出し、最高の段階につれてゆくのが、悲劇である。絶望の意識である。これを最も克明に表現した詩は善導の「二河白道喩」である。「往生要集」の第一章には、多くの経典を引いて厭離穢土を説明している。その厭離穢土とは絶望の意識、悲劇的人生観である。これを源信の「二十五三昧式」には、

次ニ、人道トハ此ノ身常ニ不浄ニシテ、雑穢其ノ中ニ満ツ、内ニ生熟蔵アリ、外ニ皮膜ヲ相ヒ覆ヘリ、垂汁常ニ流出シ、膿血亦充満セリ、此ノ如キ臭穢ノ身ハ猶ホ朽タル城廓ノ如シ、日夜煩悩ニ逼遷セラレテ、暫モ停息スルコトナシ。愚夫ハ常ニ愛染シ、知者ハ染著ナシ。大経ニ云ク、一切ノ諸ノ世間ニ生アルモノハ皆死ニ帰ス、盛者必ズ衰アリ、会者ハ別離アリ、法トシテ常ナル者ナシト。東岱前後ノ煙即チ朝ニムツビ、夕ニ語ル輩ナリ。北芒新旧ノ露、ムシロ遠聞近見ノ人ニアラズヤ」（「恵心僧都全集」第一三七頁）

とある。浄土教は人間のかなしみを大悲している。源氏物語には、人間として最大の幸運を具足しているかにみられる光源氏が、実母・正妻葵上、父桐壷帝との死別・義母・朧月夜との破戒、政敵との

抗争等で、二十五歳頃に「世の中なべて厭はしう思し」と、人生行路難の吐息をつきはじめてから、登場人物も各々世を厭ひ捨つ、厭ひ離る、厭ふ、捨つ、別る等と暫々つかっている。源氏物語で絶望の壁につき当った者は、光源氏や女の三の宮のみではなく、藤壺、紫の上、八つ宮、浮舟等がいる。これらは皆菩提を求めて出家している。浄土教とは人間のかなしみを大悲する教である。大悲とはかなしみを捨てずかなしみを契機として浄土に往生せしめる教である。源氏物語時代は、律令政治下の貴族の権勢も傾きかけ、宮廷を中心とした貴族の、兄弟、同族の紛争も絶えず、家庭的な悲劇も多く、作者紫式部の運命も亦そうであったから、観経が普及し、紫式部も観経を世界観としたのである。源氏物語が後生ひきつづき現代にまでも、宮廷の女性並に貴族は勿論、日本文化を愛し創造する人々、並に庶民一般にも愛読されているのは、浄土教の発展普及と深く因縁しているのである。人間のかなしみは貴賤貧富を問わないが善導浄土教の本願は、庶民のかなしみを済度するにあった。それが源信に伝わり法然、親鸞と継承されるに至って、その本願は弥々深められたので庶民は渇ける者の水を求めるが如く、浄土教に帰依した。そこで庶民には源氏物語を享受しうる世界観は、成熟していたけれども、古典を読む力なく源氏物語を味わう機会に恵まれなかつた。然るに宗教的霊性と共に芸術的天才に恵まれ、庶民としてのかなしみ—悲劇的絶望の体験者である庶民出自の芸人から、今様、念仏踊、念仏歌謡・平曲・謡曲・宴曲・浄曲・歌舞伎・説経節等の近世歌謡が創作されて、源氏物語を読んだと同様の浄土教的美意識を学ぶことができた。美と信と善の結合界である。今日でも川端康成・井上靖・木下恵介の芸術には、源氏物語のかなしみが流れている。

宣長が儒教全盛、文芸を道徳と政治との手段以上にしか考えなかった時代に、源氏物語の文芸精神が、もののあはれという深く浄く純粋な純な大慈悲心に類する感情であることを徹見したのは、偉大な学績であるが、仏教を外来思想として斥けた為に、紫式部の人生観の根拠が、天台浄土教にあることを知りえなかった。

補註　法華経序品に「韋提希の子阿闍世王、若干の百千の眷属と俱なりき。各、仏足を礼し、退いて一面に坐しぬ」とあり提婆達多の事は、第十二提婆達多品にある。法華経を読んだ紫式部は、これらからも王舎城の悲劇を信解することができた。

(二)　源氏物語と往生要集

(一)　序　　説

章を改めて「源氏物語と往生要集」について考究してみたい。往生要集は源信の師であった天台宗良源（康保元年九六四没）の「極楽浄土九品往生義」を参考にしている。「九品往生義」は、「観経」の九品段の注釈である。私が前述した如く源信自身は劣機を省み劣機相応の口称の念仏往生を信行している。源信は次の如く述べている。

問ふ。凡夫の行人は、物を逐うて意移る。何んぞ常に仏を念ずる心を起すことを得ん。

答ふ。彼若し直爾に仏を念ずること能はずんば、応に事々に寄せて、其の心を勧発すべし。謂はく、遊戯談咲の時は、極楽界の宝池宝林の中に於て、天人聖衆とともに、是くの如く娯楽しむことを得んと願へ。若し憂苦の時は、諸の衆生と共に、苦を離れて極楽に生れんと願へ。若し尊徳のひとに対せば、極楽に生れて、是くの如く世尊に奉へんと願ふ当し。若し卑賤のものを見ば、極楽に生れて、孤独の類を利楽せんと願ふ当し。凡そ人畜を見る毎に常に応に是の念を作すべし。「願はくば此の衆生と共に、安楽国に往生せん」と。若し飲食する時は、極楽の自然微妙の食を受けんと願ふ当し。衣服臥具、行往坐臥、違縁順縁、一切準じて知れ。事に寄せて願を作すは、是れ「華厳経」等の例なり。（往生要集・大文第五・第三・対治懈怠　岩波文庫本、花山信勝訳、二六六頁）

これは華厳経の事々無碍法界観、天台家の諸法実相観によるものであり、観経所説により極楽浄土を芸術化して、悦楽することにより西方十万億土の浄土を憧憬して、人界除苦悩法の助縁としているので、唯美的、ローマン的である。然るに栄華に誇り現実を享楽して深い仏教の真理を信解しえない上層藤原貴族は、原始信仰（シャーマニズム）と、密教を混合し、密教の祈禱が盛行し、密教の理趣経や即身成仏義が、人間の生物的本能を肯定したものと、単純に信じられて、仏教の否定的世界観を了解して、厭離穢土・欣求浄土するには余りにも俗界の楽みが多かったので、古代的連続的世界観の呪術的信仰が盛行していた様に、豪華な物質生活、音楽や祭り等の遊び、巨富を以て大寺院を建立すること等が、そのまま往生極楽の助縁となる。即ち芸術的悦楽がそのまゝ宗教的法悦であると信じられた。

極楽　古代文芸で往生に関することばで、最も多く使われているのは、「極楽」である。源氏物語にも七語あり、「浄土」は一語がある。それに対比すべき「地獄」「娑婆」は皆無である。次の如くである。

風烈しう吹きふぶきて、御簾の内の匂ひ、いと物深き里方にしみて、名香の煙もほのかなり。大将の御にほひさへかをりあひ、めでたく、**ごくらく**思ひやらるる夜のさまなり。（源氏物語・賢木）帰りざまに立寄り給ひて、「しかじか、権大納言殿の御八講にまいりて侍りつるなり。いとかしかう、生ける**浄土**の飾りに劣らずいかめしう面白き事どもの限りをならし給ひつる。（同・蓬生）仏、経箱、快簀の整へ、誠の**極楽**ぞ思ひやらるる。（同・若菜・上）

さすがに物のねめづる阿闍梨にて、「げにはた、この姫たちの、こと弾きあはせて遊び給へる、河波にきほひて聞え侍るはいと面白く、**極楽**思ひやられ侍るや」と、古代にめづれば、（同・橋姫）**極楽**といふなる所には、菩薩なども皆斯かる事をして、天人なども舞ひ遊ぶこそ尊かンなれ。行ひまぎれ、罪得べきことかは。（同・手習）

極楽という観念は、既に往生要集以前にあり、而して往生要集の出現により弘く流布されたのであるが、源信の極楽は、現世は穢土也と宗教的決断を以て絶対否定して、弥陀界に観入している、心は浄土に住み遊ぶ妙好人の観うる現世である。然るに王朝の貴族達は、享楽の生活、芸術的宮廷、寺院を形容する詞として、「極楽」を使っ

ているのである。視覚、聴覚、嗅覚等の官能的悦楽を以て極楽としているのであって、かかる美的媒介（方便）なしには、極楽を感じ得なかった。彼らの極楽は芸術的虚構の夢幻的方便化土であって、定・行・信から得た真実報土ではなかった。だから仏縁も僧侶も儀式も感覚で捉えている。不真面目な感覚的自己高揚である。枕草子には「説経師は、顔よき、つとまもらへたるこそ、その説く事のたふとさも覚ゆれ」といったが、源氏物語にも、

弥生の十日なれば、花盛りにて、空の気色などもうららかに物面白く、仏のおはする所の有様遠からず思ひやられて、殊に深き心もなき人さへ、罪を失ひつべし。（中略）

夜もすがら、尊き事に打ち合せたる鼓の声絶えず、面白し。ほのぼのと明けゆく朝ぼらけ、霞の間より見えたる花のいろいろ、なお春に心とまりぬべく匂ひわたりて、百千鳥の囀るも、笛の音に劣らぬ心地して、物のあはれも面白さも残らぬ程に、「綾王」の舞ひて、急になる程の末つ方の楽、花やかに賑はしく聞ゆるに、皆人のぬぎかけたる物のいろいろなども、物の折からに、をかしうのみ見ゆ。みこたち上達部のなかにも、物の上手ども、手残さず遊び給ふ。（源氏物語、御法巻）

これは源氏が亡妻紫上の法華経の追善供養であるが、世の常の管絃歌舞の遊興と余り違はない。ここの物のあはれは、悲哀の底に坐し機の深信から一心正念したのではなく、官能的恍惚境により、「仏のおはす所遠からず」と、現世に引きよせて、悲哀を忘却せんとするものである。「観経」に西方十万億土の極楽国土を懸念諦観した「此を去ること遠からず」とは、全く天地雲泥の差である。仏教では諦観によって平等性智・妙観察智、大圓鏡智、成所作智の四智を得、又開眼以外に慈眼、天眼を得と説く。この四智や天眼で以って娑婆を観れば、浄土三部経に書かれた様な極楽として感得される。これを娑婆即寂光土と説くのである。「大無量寿経」の第四大願に「設我得仏、国中人天、形色不同、有好醜者、不取正覚」とあってこれを懐徳の「浄土群疑論」には、「形無美醜之願」と称した。尚第一大願は、「設我得仏、国有地獄、餓鬼畜生者、不取正覚」という「無三悪趣之願」である。これらすべて大経の四十八大願は、超世の悲願を行ずる菩薩の理想界である。成仏道心即ち菩提心の菩薩は、娑婆の四苦八苦、醜悪を分別せず、平等性智を以て有無を離れ盡く阿弥陀仏の善行方便として摂取し忍受するのである。この心位を「大経」の「重誓偈」に、「仮令身を、諸の苦毒の中に止むとも我が行は精進にして、忍びて終に悔いざらむ」と説く。煩悩即菩提生死即涅槃とも同意である。源氏物語に「地獄」「娑婆」の語が一語も無いのは、優美を趣味とした貴族達が嫌って使わなかったのである。作者はこの社会を写実しているのである。王朝の貴族達は、享楽生活を宗教的に是認しているのであって、もはや仏道ではない。平安貴族は人間を解脱していない。「もののあはれ」という実存的油脂性・「つれづれ」の不安・孤独・感傷を超克していない。然し源信の芸術的浄土教は、有害無益ではない。その有益で特筆大書すべきは、人類史上最も進歩した文化宗教である仏教と芸術を親近させたことである。即ち日本芸術の品位を、仏教によって高尚にし新しくしたことである。

それは「雅び」なることばに現われている。「雅び」は、既に万

葉集にみられる。これは詩経から学んだものであろうが、平安朝まで、殊に源信教の感化をうけて、一層高尚になった。それは浄土教を信じる貴族によって成されたことは、雅びの語源が、**宮び**、**御家び**であることでわかる。雅が貴族趣味・宮廷詩である。生活や社会環境に調和し悲劇性なき平面的優美、優雅である。抑々美術そのものは、平凡人ならぬ天才の非凡な修練によって、非日常的ならぬ新理想や、深刻な自然や人生を表現するのであるから、貴族的存在である。それは崇高な理想を行持した源信の生活・著述・芸術にみられるが、その京の午寅に峻立する叡岳の如き立体的崇高は、賀茂川の盆地に平面的平和を楽んでいる貴族達は、味得しえなかった。源信の生活・著述（私は彼の著述のすべてを詩とみる）芸術には、詩経の六義が存在している。これを密教を学んだ源信は、弘法の「文鏡秘府論」等から学んでいると思う。但し源信には、六義の風は著明な個性を以って表現されなかった。定観を重んじ遊行せず下賤に接する機会が尠かったからである。これは同時代の先輩空也、又は遠き後輩法然に一任した相である。

(二) 方便論……螢巻の物語論私見

源氏物語は勿論小説であって、哲学書ではないが、螢巻に文芸哲学ともいうべき物語論がある。日本文芸哲学史上最初の物語論であって、宣長以来学者が重要と認めて研究したものである。これを抄出すれば次の如くである。

よきさまにいふとては、よきことの限りをえり出、人にしたがはむとては、又あしきさまのめづらしきことをとりあつめたる。みなかたがたにつけて、此世の外の事ならずかし。仏のいとうるはしき心にて、ときをき玉へる御法もを**方便**といふ事ありて、さとりなきものは、こゝかしこたがふうたがひをきつべくなん。いひもてゆけばひとつむねにあたりて、**菩提と煩悩**とのへだたりなん、この人のよきあしきばかりのことはかはりける、よくいへば**すべて何事もむなしかうずなりぬや**と、物語をいと**わざとの事**にの給ひなしつ。

方便の教理は、法華経方便品によったと考えられる。方便品には、

舎利弗、吾成仏してより已来、種々の因縁、種々の譬喩を以て広く言教を演べ、無類の方便を以て衆生を引導して、諸の著を離れしむ。

舎利弗、如来は能く種々に分別し、巧みに諸法を説き、言辞柔軟にして衆の心を悦可す。舎利弗、要を取りて之を言はば、無量無辺未曽有の法を、仏悉く成就し給へり。（中略）仏の成就したまへる所は、第一希有難解の法なり。唯仏と仏とのみ、乃し能く諸法実相を究屋し給へり。所謂諸法の如是相・如是性・如是体・如是力・如是作・如是因・如是縁・如是果・如是報・如是本末究竟等なり。

と説く。「往生要集」にも次の如く出ている。

若し諸の菩薩、深般若波羅蜜多の方便善巧を行ずれば、一心一行として空しく過ぎ、一切智に廻向せざるもの有ることなし。（大文第四正修念仏・作願門）大般若経より引く、

相好の業因には、其の総と別と有り、……別因と言ふは……一に

善く事業を修し、二に善巧方便し、三に有情を饒益し、四に無倒廻なり。（同上）喩伽論より引く

方便とは能く方法を用て衆生を導くことである。「法華経玄賛」には進趣・施為・集成・権巧の四方便を説いている。

譬喩 とは、法の義を解知易からしめん為に、類似の事例等に例比して之を説明するをいふ。大品般若経第二十六・七喩品には、「須菩提、今汝が為に譬喩を説かん、智者は譬喩を以て解を得ん」。華厳経第一世間浄眼品には、「諸縁譬喩を以て方便して所楽に随ふ」とあり、「大智度論第三十五には、「譬喩に二種あり、一に仮を以て喩とし、二には實事を喩となす」といい、同第十には、「譬喩の法は小を以て大に喩ふ。人面の奸の如きを満月の如きに喩ふ」とある。大般涅槃経第二十九には、譬喩には総じて順喩・逆喩・現喩・非喩・先喩・後喩・先後喩・廻喩の八種の別あることを説いている。釈尊は説法中に常に之を用い、譬喩経・雑譬喩経・百喩経等を始め、大小乗経論中に之を挙げること甚だ多い。羅什訳大品般若経に十喩、維摩経に十喩、金剛般若波羅密経に六喩、菩提流支訳金剛般若波羅密経に九喩、法華経の七喩等がある。これによって仏典が文芸的・詩的であることが了解できる。

法華経の七喩とは、火宅（譬喩品）窮子、（信解品）、雲雨（薬草喩品）、化城（化城喩品）、繋珠（五百弟子受記品）、髻珠（安楽行品）、醫師（如来寿量品）である。これも極めて詩的である。和辻哲郎は、法華経は一佛乗とか如来の寿量長遠思想（ロゴス）を表現する為に、一切の論理的展開・合理的描写を避け、只感覚的なもののみの集積によって、超感覚的な印象を与えんとした文芸であると結論して、これに三様式ありと認めた。第一は一つのロゴスを宣伝する為に、外に向って論理的展開をさせず、内へ内へと渦を巻いて行く様に、種々雑多な感覚的描写や、言葉を以てする音楽や、言葉によって色を塗る絵画等が、繰りかえし繰りかえし描写されているので、これを声明によって読誦する裡に暗示にかかり陶酔感を起すのである。第二は一つのロゴスを芸術的に表現することが主であって、人生の諸相、人間の生活、自然の美を客観的に写実するのではなく、これらを方便説法という主観界に溶解し、思想を思索すべく要求せず、感得せよと要求する。而して信解者はこれによって法華経的理想の人間並に人生を創造する無限の能力・並に自然の観照眼を獲得する。第三は感覚的なものの極端な累積である。これにより表象や思惟の能力を圧倒し、無量・無辺・無限の想像力を発させる。ギリシャ芸術の合理的な明晰な描写ではなく、文章の律動や偈頌の韻律の響によって幻想的陶酔を醸し出す、音楽的・絵画的効果あるものである。これは一仏乗並に如来の寿量長遠を獅子吼する観念詩である。源氏物語螢巻でいう「いとわざとの事になし」というのである。

法華経は天台宗の根本経典であったから、平安朝に最も流布した経典である。よって紫式部は、勿論自ら（みずか）声明によって日常読誦し、幾度も幾度も法華八講に会して僧の読誦を聞き、又説経も聴いて、詩的に陶酔し法悦に遊んだのである。その心境は信と美の渾一世界である。紫式部の人間観・文芸観は、法華経・往生要集・観無無量寿経・白氏文集から多くの影響をうけている。源氏物語には引用仏典中最も多く、二十四回法華経が引かれてある。源氏物語の詩は、

法華経の如き観念詩ではなく、人生詩である。歴史上の事実を仏教的理想によって虚構しているから、「この世の外のことならぬ」写実小説であり、「わざとのことにの給ふ」理想小説である。「わざとのこと」とは、源氏物語が目的小説即ち「煩悩と菩提」の隔りを書く仏教的理想小説であるということである。その象徴的人物が光源氏と藤壺である。これが「よきことの限り」「あしきことの限り」に描かれてあるけれども絶対極悪の煩悩人ではなく、又勿論成道した菩薩ではなく、地獄と極楽の如く阿僧祇の隔りある菩提と煩悩の間を上下し右往左往していることが、一人物の上に描かれてあるのであり、これを仏智未覚の人からみれば、**ここかしこたがふうたがひをゝく**」のである。然しこの隔りある菩提と煩悩も、仏縁に逢って悟入すれば、水を離れて氷無く、天上の雲が地下水と成る如く、煩悩を離れて菩提はない。極重の悪人も仏日に照らされれば、菩提心を発すことは、恰も日輪東山を照して闇破られ、氷は溶けて水となり、日向葵が日に向きを転ずるが如くである。これを**煩悩即菩提**という。これを叙述する為に、縺れた糸の様に複雑な因縁を物語ったのである。天台で法華経の迹門の説法の中心部分を、法説明・譬喩説明・因縁説明の三段ありとし、これを三周説法と称している。因縁説法とは、最も下根の声聞人に因縁を説いて一乗に悟入せしめる法である。源氏物語の作者はこれに倣って物語っている。方便引入しょうとする釈尊の慈悲説法する法華会座からでさえ、罪根深重の五千人の増上慢が中座退場したことが方便品に説かれた様に源氏物語の「秘密のロゴス」「究極的聖」である**煩悩即菩提**を構想叙述した源氏物語も、**悟りなき者**には了解できぬというのである。これを了解しうる者は、摩訶止観の禅定により諸法実相の妙法を體解した者である。紫式部は勿論その一人である。

源氏物語の仏教的批判　だから「無名草子」に、

さても此の源氏作り出でたることこそ、思へど思へど此の世一ならず珍らかに思ほゆれ。誠に仏に申し請ひたりける験にやとこそ覚ゆれ。……凡夫の仕業とも覚えぬことなり。

と感激したのである。四辻善成の「河海抄」に、式部は「仏道は天台一心三観の血脉をつぎ、観音の化身也」と述べ、

石山寺の通夜の時物語の趣向を忘れぬさきにとて、仏前に有ける大般若の料紙を本尊に申請て、飜して須磨明石の両巻を書とどめける。後に罪障懺悔のために般若一部六百巻を一筆に自書て、奉納しける今にかの寺にあるよし也。

とかき、西三条実澄の「明星抄」に、

此物語一部の大意、面には好色妖艶を以て建立せりといへども、作者の本意、人をして仁義五常の道に引いれ、終に中道実相の妙理を悟らしめて、出世の善根を成就すべしとなり。されば河海にも君臣の交、仁義の道好色の媒、菩提の縁にいたるまで、是をのせずと云事なしといへり。

といい、肖柏の「孛花抄」もこれに同じだ。「明星抄」は更につづけて、

爰に不審をかくる人あり。此物語はことごとく好色淫乱の風也。何とて仁義五常を備ふべき哉と。是道をしらざる人の一隅の管見

なり。（中畧）経教の中にも提婆が五逆、又仁王経に九百九十九王のくびをきらんとせし事、又阿闍世太子の父王を籠者し、母を害せんとせし事も、末世の群生を戒めんため也。（中畧）この物語もまづ人の耳にちかく又人の好ところの淫風を書顕して、善導の媒として中庸の道に引入、終には中道実相の悟におとし入べき**方便**の権教也。

とのべ、更に

天台一家の心、四教に付て、化義化法の両種の四教あり。先化法の四教といふは、三蔵教・四阿含・八十誦律・五部律・一切の小乗論・戒定慧の三蔵也、さまざまに説給へども、所詮を取て戒定慧の三法門也。是小乗也。

通別圓の三教は大乗也。三大乗と云是也。化儀の四教と云は、頓漸、不定、秘密、此物語四教をならべしるせり、

とのべた。季吟の「湖月抄」上巻・発端・大意に「**抄**」として、次の如く載せている。

凡内典外典は千万軸にして難解難入也。仍て権化の**方便**を以て、一代権実内外の書典の意旨をひろひて、此一部を決す。しかも假名四十七字を出ずして世間の出世の萬法をのせて、明なる事明鏡に向ふがごときもの歟といへり。しかれば則天地も始終あり、況んや人間にをいてをや。是に仍て盛者必衰、会者定離、生老病死有為転変の理を深くしめす。此うへにおいて世間常住壊空の法文をたて、**煩悩即菩提**の文此物語の大意也。

とのべた。以上長々引用した諸抄の如く、仏教で源氏物語を批判することに、宣長は反対しているけれども、これは宣長の狭量である。

島津久基が、

源氏物語だけを取扱ってゐては、又紫式部に関する文献のみでは不十分なこと言ふまでもない。此の意味から私は又作者の意図の中の――無意識な場合は描くとして、半意識的及び有意識的な所さへあると思ふが、――仏教的気分と観念と理想と、随ってそれの現はれとしての構想や人物の性格や行動等に於けるものをまで否定し或は閑却し去るのは却って謬であるとしたいのである。（源氏物語二八一頁）

という研究方法に与するものである。

源氏物語に叙述された方便　前に抄出した如く、「明星抄」等に於て源氏物語全巻が、方便であることに着眼しているけれども、それを具体的に指摘していないので、左に抄出してみた。

いはけなき程より、悲しく常なき世を思ひ知るべく、仏などのすすめ給ひける身を、心強く過して、つひに来し方ゆく先も例あらじと覚ゆる悲しさを見つるかな。（御法）

この世につけては、飽かず思ふべき事をさをさあるまじう、高き身に生まれながら、また人より異に、口惜しき契りにもありけるかなと、思ふこと絶えず、世のはかなく憂きを知らすべく、仏などの掟て給へる身なるべし。（幻）

世の中をこと更に厭ひ離れねと、すすめ給ふ仏などの、いとかくいみじきものは思はせ給ふにやあらむ（総角）

さま異に志したりし身の、思ひの外にかく例の人にてながらふると、仏などもにくしと見給ふにや、人の心を起させむとて、仏のし

給ふ方便は、慈悲をも隠して、かゆうにこそはあなれ。（蜻蛉）

法華経信解品の窮子喩は、父を捨てて乞食となって幽逝困窮する一人息子を、巨富を譲ってやりたい大富長者の老父が、八方捜索して探しあてたが、子は父に会って父と知らず且恐れ遁走する。これを苦心**方便**して家に帰し全財宝を譲ったとある。大富長者とは如来である。現実の苦悩は仏の方便である。ニーチェも「苦悩は人を救済へと運ぶ最も足早き動物である」といった。魂の美が挫折を通して現われる。これをさとり無き人は知らず、生死の中に諸の熱悩を受け、迷惑しているのである。

菩薩道の世間苦には、上増慢、外道の、悪口・罵詈・誹謗がある。**これも**亦慈悲を隠した如来の**方便**である。次に抄出する法華経常不軽菩薩品は、これを説教した。

常不軽菩薩、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷を皆悉く礼拝讃歌して、是の言を作さく、我深く汝等を敬う。敢えて軽慢せず。所以は何ん。汝等皆菩薩の道を行じて、当に作仏することを得べし。而も是の比丘、専ら経典を読誦せずして、但礼拝を行ず。乃至遠く四衆を見ても、亦復故らに往きて礼拝讃歌して、是の言を作さく、我敢えて汝等を軽しめず。汝等皆、当に作仏すべきが故にと四衆の中に、瞋恚を生じ、罵詈して曰く、（中略）此の如く多年を経歴して、常に罵詈せらるれども、瞋恚を生ぜずして、常に是の言を作す。汝当に作仏すべし。是の語を説く時、衆人、或は杖木、瓦石を以って、之を打擲すれば、避け走りて遠く住して、猶高声に唱えて言はく、我敢えて汝等を軽しめず、汝等皆当に作仏すべしと。其、常に是の語を作すを以っての故に、増上慢の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、之を号して常不軽と為く。

源氏物語「総角」の巻には、宇治の八宮の死霊が阿闍梨の夢に現われて、浄土往生が不安だから、追善供養を頼むので、阿闍梨は

たへたるにしたがひて、おこなひをしはべる法師ばら五六人してなにがし（称名）の念仏なむ仕りまつらせはべる、さて思ひたまえたることはべりて、**常不軽**をなむつかせはべる。

とある。まづ口称念仏で往生を願求している。次には罵詈、打擲する悪人をば、成仏道の権化方便と信じて、大地に立って歓迎礼拝し瞋恚・軽賤せず、現実の菩薩行の一歩一歩に、浄土往生の信念を確実にしているのである。密教の祈禱や、天台の止観や仏教的芸術の観照等による源信教学の観想念仏を超越せんとするものである。六道の天上界は、芸術美自然美の世界と考えられる。この世界からは四聖の世界に向上進化できない。人間界からのみ可能である。それは人間が煩悩を意識しうるからである。煩悩即菩薩ということは、人間界においてのみ可能である。だから源信は、「横川法語」に、「まづ三悪道を離れて人間に生れたること大きなるよろこびなり」といったのである。その「往生要集」には、

煩悩は即ち菩提なり。一一の塵労門を飜せば、即ち是れ八萬四千の諸沈羅密なり。無明を変じて明と為るは、水を融かして水と成すが如し。更に遠き物に非ず、餘處より来るにもあらず。但一念の心に普く皆具足すること、如意珠の如し。（大文第四・正修念佛・讃歎門）

問ふ。煩悩と菩提と、若し一體ならば、唯意に任せて、惑業を起すべき耶。答ふ。是くの如き解を生す、これを名づけて悪取空

の者と為す。専ら佛弟子に非ず。（中畧）煩悩と菩提と體は是れ一なりと雖も、時間異なるが故に、染と浄と同じからず。水と氷の如く、亦種と果との如し。其の體は是れ一なれども、時に随つて用異なるなり。此に由って、道を修する者は、本有の佛性を顕せども、道を修せざる者は、終に理を顕すこと無きなり。（同）

と説いた。即とは不離である。氷を離れて水無く、煩悩を離れて菩提は無いのである。一切苦は成仏道の方便である。人間は一切皆苦・衆苦充満界であるが故に、人間界のすべてが成仏方便道である。源氏物語とはこれを物語っているのである。華厳経入法界品の善哉童子の求道歴程に類している。これからも構想の影響を受けているかもしれない。こうした世界観から「すべて何事もむなしからずなりぬや」という構想・人間造型が生れたのである。

厭離穢土・欣求浄土　の世界観は、唐の善導浄土教の主潮であって往生要集巻上すべてはこれを説いている。即ち大文第一・厭離穢土。第一地獄―初等活地獄…二黒繩地獄…三衆合地獄…四叫喚地獄…五大叫喚地獄…六焦熱地獄…七大焦熱地獄…八阿鼻地獄。第二餓鬼道。第三畜生道。第四阿修羅道。第五人道…一不浄…二苦…三無常。第六天道。第七総じて厭相を結ふと説いた。源氏物語の厭世観即ち否定的世界観は、次の如くである。

世の中なべてはかなく、厭ひ捨てまほしく（賢木）
誠に御心と厭ひ捨て給ひける（柏木）
世の中、なべてはかなく、厭ひ捨てまほしきことを、聞えかはし給へど（鈴蟲）
俗の御かたちにて、世の中を深う厭ひ離れしかば（總角）
ただ厭ひ離れよと、殊更に仏などのおもむけ給ふやうなる有様にて（橋姫）
世の憂きにつけて厭ふは、なかなか人わろきわざなり。（夕霧）
厭ふにつけて延び侍る命のつらく、又いかにせよとて、うち捨て給ひけむと怨めしく（早蕨）
世を捨てたる法師（若紫）
やがて世を捨てつるかどでなりけり。（松風）
かたがたにつけて世をそむき去りつつ。（橋姫）
かの按察かくれて後、世をそむきて侍るが（若紫）
尼などの世を背きけるとも（葵）
世のおもしとものし給へる大臣の、かく世を遁れ給へば（賢木）
かく世を離るるさまにものし給へば（夕顔）
世をわかれ入りなむ道はおくるとも同じ所を君もたづねよ（横笛）
憂き世を行ひ離れなむとおぼすに（賢木）
いといたく思ひすまし給へりし御すみかを捨てて、うき世に帰り給へる志浅からず。（松風）
心こそうき世の峯を離るれど行方も知らぬあまの浮木を（手習）
うき世にはあらぬところのゆかしくてそむく山路に思ひこそ入れ（横笛）
うき世にはあらぬ所を求めても君がさかりを見るよしもがな（東屋）
憂き世にはゆき消えなむと思ひつつ思ひの外になほぞほどふる（幻）
うき世をば今ぞ別るる留まらむ名をばただすの神にまかせて（須

磨）

とまる身も消えしも同じ露の世に心おくらむほどぞはかなき（葵）

秋風にしばしとまらぬ露の世を誰か草葉の上とのみ見む（御法）

このやうな厭世観は、源氏物語を貫いているが、これは往生要集の感化が多かったと思う。然し只人間苦を消極的に否定するに止らず厭離穢土、欣求浄土せよとの慈悲を隠した仏の方便であると積極的に肯定しているのである。さすれば人間を楽観して、禅僧の如く明朗に呵々大笑する天地が生れそうであるのに、それが源氏物語にも紫式部にも、これらの環境社会にもみられない。それは源信の来迎信仰にもしられる様に、極楽浄土が浪漫的ユートピアとして西方十万億土に在るのである。一生勤苦すと雖も、臨終の夕には弥陀等廿五菩薩の来迎にあづかって安養浄土に往生できる。但し娑婆の苦に耐え苦を防ぎ遠ざけ、極楽、往生のできる道は、念仏であると信じた。信とは弥陀佛の幸福に帰命する心である。念とは帰命の心を忘れないことである。

その幸福が西方十万億土に在り、それは念仏行に因って死後の極楽往生が可能であるとの信仰は、現実生活の全体が仏道になっていない。現在時が絶対的厳粛且高価に認識されていない。現在時は無常時である。その無常を恐怖悲観することは深刻である。即ち**無常のあはれ**は深く表現されてあるが。遷流する無常時が、幸福を増進する積極的時間とは認識されていない。欣求浄土の明りが薄い。行往坐臥の日常生活と即した念仏ではなく、芸術的・貴族的・隠遁的・観想的に実生活と遊離した念仏であった。これは外ならぬ源信教学の観相的性格である。これが次の如く源氏物語に例挙できるのは、

王朝文芸の宗教的史観　源氏物語の浄土教様式

往生要集等の源信浄土教の影響である。

①（宇治の八宮は）秋の末つ方四季にあててし給ふ御念仏を、この河面は網代の浪も、この頃はいとど耳かしがましく静かならぬをとて、かの阿闍梨の住む寺の堂にうつろひ給ひて七日の程行ひ給ふ（橋姫）

これは往生要集大文第六別時念仏第一尋常の別行に「日々の行法に於ては、常に勇進すること能はず。故に応に時有って、別時に行を修すべし。或は一二三日乃至七日、或は十日乃至九十日、楽に随ってこれを修せよ」とあるによっている。

②　秋深くなり行くままに、宮はいみじうもの心細くおぼえ給ひければ、例の静かなる所にて、念仏をも紛れなうせむと思して、君達にもさるべきこと聞え給ふ（椎本）

これは臨終を覚悟した八宮の念仏行相で、往生要集大文第六の第二臨終の行儀の「行者等、若しは病み、病まざらんも、命終らんと欲する時は、一ら上の念仏三昧の法に依り、身心を正当へ、面を廻らして西に向け、心も亦専注して阿弥陀仏を観想し、心と口と相応して聲々絶ゆること莫く、決定して往生の想を、蓮臺の聖衆来って迎接するの想を作せ」に拠る往相の念仏と考えられる。「君達にもさるべきこと聞え給ふ」とは、遺言である。川端康成の所謂「末期の眼」をもって、子女の処世訓を述べている。遺言の文芸史（末期の眼・一期一會の美・念死・臨終の文芸）を、考えている私には、貴重なものである。俗世から離れて**山寺**に籠る八宮は、正に臨終の覚悟である。その時の心境を、

③　明日（山寺に）入りたまはむとての日は、……いかにしてかは

若き人のたえ籠りては過ぐいたまはむ、と、涙ぐみつつ、**念誦**したまふさま、**いときよげなり**（椎本）

恩愛を捨てて無為に入ることは至難であるから、光源氏も紫の上の生存中は出家せず、朱雀院も女三の宮の仕末をつけて出家している。然るに八宮は、二人の娘を残して山寺に遁世しょうと決断したのは、世間はたよりになる一物も無き虚假であり、只念仏のみぞ真実であること、厭離穢土、欣求浄土と強く信じたからである。信頼できるものは仏のみであるから、涙をこめて遺子の幸福を祈念しているのが、この八宮の**念誦**である。愛欲煩悩を菩提心に転じた念仏を遺子の運命上に還相廻向しているのである。それを**いときよげなり**といったのは崇高美のことである。紫式部が畢竟帰依した浄土教は宇治十帖に形象せられてあり、理想像は八宮であると考えられる。**きよげ**という語彙もそれを考証する縁である。

④　なにがしは惜しむべき齢たらねど、母の旅の空にて、病おもきを助けて、念仏をも心乱れずさせむと、仏を念じたてまつり思う給へし程に（夢浮橋）

これは往生要集大文第六の第二の次臨終観念の「善友同行にして、其の志有らん者は、仏の教に順はんが為に、衆生を利せんが為に、〔自らの〕善根の為に、〔往生の〕縁を結ばんが為に、染患の初より、病床に来問して、幸ひに勧進を垂れよ矣。」に拠っている。

⑤（藤壺は）のちの世の事をのみおぼすに、頼もしく、むつかりしこと離れておもほさる。常の御念誦堂をばさるものにて、ことに建てられたる御堂の、西の対の南にあたりて、少し離れたるにわたらせたまひて、とりわきたる御行ひさせたまふ（賢木）

これは往生要集大文第七念仏の利益の第四当来の勝利「華厳経」の偈に云はく、若し如来の少かの功徳を念じ、乃至一念の心だも専仰しまつらば、諸の悪道の怖れ悉永く除り、智眼此に於て能く深く悟る」等とあるに拠る。

⑥（藤壺は）わが身をなきになしても、東宮の御世をたひらかにおはしまさば、とのみおぼしつつ、御行ひたゆみなくつとめさせたまふ、人知れず、あやふくゆゆしう思ひきこえさせたまふ事しあれば、我にその罪を軽ろめて許したまへ、と仏を念じきこえたまふに、よろづを慰めたまふ（賢木）

これは往生要集大文第七念仏の利益の第一滅罪生善の「注意して息まず、白毫を念ぜん者は、……九十六億那由他恒河沙の、微塵の数の劫の、生死の罪を除却かん」等に拠ると考えられる。ここには子を憶ふ母親に、菩薩の代受苦が顕現している。

重松信弘氏の調査によれば、[1] 源氏物語には、念仏・念誦・勤め・行いの語が計一一八あり、その内容も混淆している。念仏の意義、内容は、理観念仏（実相念仏）、事観念仏（観相念仏）、口称念仏（称名念仏）の三である。念ずる仏も、仏・阿弥陀・観音・薬師・仏神・神仏等計一七六あり、とにかく顕・密・浄土等複雑である。これらが儀式的・芸術的・貴族的な仏教、――源信浄土教の一面に対して、紫式部は満足できなかったのではないかということが、源氏物語を読んで感じられるのである。

⑦（女三宮は法華）経は六道の衆生の為に、六部書かせ給ひて、自らの御持経は、院御手づから書かせ給ふ（鈴虫）

六道は往生要集から学んだのであって、女三宮自らも六道を輪廻す

る罪悪深重の一衆生としての自覚をもって書いたのである。然しこの自覚は、源信や紫式部の如き傑れた天才に限られたことであったろう。「平家物語」「六道の沙汰」に謳われた建礼門の運命と比較して、この感を深くするのである。要するに源氏物語の六道は、個々人の運命に現われた内面的、精神的な不共業であり、平家物語のそれは、社会的歴史的な共業であった。

⑧　みたけさうじ（御獄精進）にやあらむ、たゞ、おきなびたる声に、ぬかづくぞきこゆる。朝の露に異ならぬ世を、何に貪る身の利にかと聞き給ふに、「南無當来導師」とぞ拝むなる。「かれ聞き給へ。この世とのみは思はざりけり」とあはれがり給ひて、〈優婆塞が行ふ道をしるべにて来む世も深き契たがふな」、長生殿の古き例はゆゆしくて、翼を交さむとは引きかへて、弥勒の世をぞかね給ふ。（夕顔）

彌勒は南天竺の婆羅門にして兜率天に上生し、現に兜率の内院に在り、當来には此土に出興して釈迦佛の處を補ひ、賢劫千佛中の第五佛となる。故に補處の彌勒という。その出世は釈尊滅後五十六億七千萬年の後で、人壽八萬歳の時である。（宇井伯壽、佛教辞典）「河海抄」には「往生要集」の大文第三の第二の「釈尊の入滅より慈尊の出世に至るまで、五十七倶胝六千百千歳を隔つ。六千百千万才（新婆沙意）」を引き、又「彌勒下生経」の、下生してこの国界において成仏する旨の文を引いている。「御獄精進」とは、吉野の金峯山を御獄と称し、それに入山する修験道者が、入山に先立って行う精進である。金峯山には一山の守護神として金剛蔵王菩薩が、鎮座すると信じられ、蔵王は釈迦又は彌勒の化身といわれ、金峯山は彌勒浄土と信じられた。「南無当来導師」とは、彌勒菩薩の名號である。「夕顔」の巻の文句は、崇高な菩薩を、優美な恋愛の私事即ち現世利益に転用している。これは光源氏が青春時代の記事である。彌勒信仰は既に聖徳太子時代から伝来して、「手習」の巻にも「御獄精進し侍るを」とある如く、平安朝時代には貴賤に流布し、道長も亦熱心な信者で、金峯山を彌勒下生の聖地と信じ、寛弘四年八月登山し自写金泥の「彌勒三経」等を埋経し、その上に金銅の燈籠を建てた。それは、九十億劫の生死の罪を除き慈尊の出世に遇わんが為であった。

⑨　Ⓐさてこそ、ここのしなのかみにも、障りなく生れ給はめ、Ⓑこの世に少しうらみ残るは、わろき業となむ聞く（夕顔）Ⓒ遙かに西の方、十万億の国隔てたる、九品のうへの望疑ひなくなり侍りぬれば（若菜上）

ここにかみ、うへとある典拠は、「往生要集」が引いた「観経」の**上品上生**とは、若し衆生有って、彼の国に生れんと願はん者は、三種の心を発して、即便ち往生す。何等をか三と為る。一には至誠心、二には深心、三には廻向発願心なり。三心を具する者は、必ず彼の国に生る。（中略）**上品中生**とは、必しも方等経典を、受持し読誦せざれども、善く義趣を解り、第一義に於て、心驚動せず、深く因果を信じ、大乗を謗らず、此の功徳を以て廻向して極楽国に生れんと願求ふ。**上品下生**とは、亦因果を信じ、大乗を謗らず、但無上道心を発し。此の功徳を以て廻向して、極楽国に生れんと願求ふ。**中品上生**とは、若し衆生有って、五戒を受持し八戒齋を持ち、諸戒を修行し、五逆を造らず、諸の過悪無から

ん。此の善根を以て廻向して、西方極楽世界に生れんと願求ふ。**中品中生**とは、若し衆生有って、若しは一日一夜、八戒齋を受持し、若しは一日一夜、沙彌戒を持ち、若しは一日一夜、具足戒を持ち、威儀欠ぐること無し。此の功徳を以て廻向して、極楽国に生れんと願求ふ。**中品下生**とは、若し善男子、善女人有って、父母を孝養し、世の仁慈を行ふ。**下品上生**とは、或は衆生有って、衆の悪業を作らん。方等経典を、誹謗らずと雖も、此くの如きの愚人は、多く衆の悪法を造り、慚愧有ること無けん。臨終に、十二部経の、首題の名字を聞き、及び合掌して「南無阿彌陀仏」と稱ふ。**下品中生**とは、或は衆生有って、五戒、八戒、及び具足戒を毀犯らん。此くの如きの愚人、命終らんと欲する時、地獄の衆火、一時に俱に至らん。善知識の、大慈悲を以て、為に阿彌陀佛の、十力威徳を説き、廣く彼の佛の、光明神力を説き、亦戒定、慧、解脱、知見を讃むるに遇はん。此の人聞き己つて、八十億劫の、生死の罪を除く。**下品下生**とは、或は衆生有つて、不善業を作り五逆、十悪、諸の不善を具へん。此くの如きの愚人、悪業を以ての故に、應に悪道に堕つべし。命終らんとする時に臨み、善知識に遇ひ、仏を念ずること能はずと雖も、俱至心に聲をして絶えざらしめ、十念を具足して、「南無無量壽〔阿彌陀〕仏と稱へん。仏の名を稱ふるが故に、念々の中に於て、八十億劫の、生死の罪を除く。〔大文第九〕

Ⓑは、当時の社会人は、仏道に歸依し、現世の宿業を見果て、愛執を留めなくなった後、後世の為出家しょうと考えていた環境の中における発言であって、これを培ったものは、「往生要集」に引いた「観経」の

彼の国に生れんと欲する者は、當に三福を修すべし。一には、父母に孝養し、師長に奉事し、慈心にして殺さず、十善業を修す。二には、三帰を受持し、衆戒を具足し、威儀を犯さず。三には、菩提心を發し、因果を深信し、大乗を読誦し、行者を勧進す。（大文第九）

等の世界観である。抑々「往生要集」は、良源の「極楽浄土九品往生義」を参考にし、「九品往生義」は、「観経」の九品段の注釈であるから、「往生要集」には、九品を力説しているのである。「和漢朗詠集」（一〇一三）を撰した藤公任（一〇四一）の歌論書「九品和歌」は、「観経」の九品段によって和歌の美を九等に品類したもので、余情（あまりのこころ）有る歌を上品上生としている。「ことばもたへにしてあまりのこゝろさへある」歌を、上々歌とするのは、言論を超絶した無限の遊心である。象徴や幽玄を意味している。浄土教の「無量壽」界である。優美と崇高と、調和と選釈の冥合界である。「和漢朗詠集」は、シナ詩人中白楽天を最も尊崇していることが、数字の上に実証できる。②

「帚木」の巻で女性を上中下の三階級に分類して品定めしているのも、「観経」の九品段の応用と考えられる。又「帚木」巻全体に蔵されてあるのは、次の如き「玉耶経」の説法から学んだのではあるまいか。

給孤独長者の長子に嫁いだ玉耶女は、驕慢であって、他（ひと）を敬ふことを知らず、父母や夫の命に従はないで、いつも一家の風波を起すもととなっていた。或る日、長者の家に入ってこの有様を見た

まうた世尊は、玉耶女を呼んで教へたもうた。
玉耶女よ、世には七種の妻がある。第一は、人殺しのやうな妻、けがれた心を持ち、夫に対して敬愛の思ひがなく、夫を軽んじ、果はあだし男に心を移す妻である。第二は、盗人のやうな妻で、夫の仕事に理解をもたず、自分の虚栄をみたすことにかゝりはて口腹の欲のために、夫の収入を浪費し、または盗む妻である。
第三は、主人のやうな妻で、家政のことを顧みず、自分は怠惰であって、口腹の欲にのみ走り、常に荒々しい語で、夫を叱咤している妻である。
第四は、母のやうな妻で、夫に対して細やかな愛をいだき、母の子に対するやうに夫を護り、夫の収入を大切にする妻である。
第五は、妹のやうな妻で、夫に仕えて誠をつくし、姉妹に対するやうな情愛と、慚愧の心を以て夫に仕える妻である。
第六は、朋友のやうな妻で、常に夫を見て喜ぶことは、丁度久しぶりに遇った友に対するやうで、行ひ正しく淑やかに、夫を敬う妻である。
第七は、下婢のやうな妻で、よく夫に仕え、夫を敬い、夫のいかなる行いにもよく忍び、怒りも怨みも抱かず、常に夫を大切に生かして行かうと勧める妻である。
玉耶女よ、汝はこのうち、いづれの類の妻となろうとするのであるか。
この教へを聞いた玉耶女は、大いにわが身を恥ぢて懺悔し、これから後は、下婢のやうな妻となって夫を助け、諸共に道を修行せうと誓った。（佛教協会版・新訳佛教聖典三〇一―三〇三頁）

これは仏教の理想の主婦を説いているが、これが次に抄出した「帚木」の巻の理想の主婦と無縁とは考えられない。

今はたゞ品にもよらじ、かたちをばさらにも言はじ、いとくちをしく、ねぢけがましきおぼえだになくば、たゞひとへにものまめやかに、静かならむ心のおもむきならむよるべをぞ、ついの頼み所には思ひおくべかりける。あまりのゆゑよし、心ばせ、うちそへたらむをば、喜びに想ひ、少しおくれたる方あらむをも、あながちに求め加へじ、うしろめやすくのどけき所だにつよくば、うはべのなさけは、おのづからもてつけつべきわざをや

これを約言すれば、温順な婦人を理想としているのである。「玉耶経」の理想婦は婢婦である。「大経」の「讃佛偈」に「たとひ身を諸の苦毒の中に止くとも、我が行は精進にして忍びて終に悔いざらん」とある法蔵菩薩の誓願を行ずるものが婢婦である。

伝教大師の「山家学生式」に、「悪事を己に向へ、好事を他に興へ、己を忘れて他を利するは慈悲の極也」とあるものが婢婦である。これを式部は温順な婦人と換言しているのである。家閥・格式・容貌・教養等には超越して、只まごころで働く婦人が第一級であると物語る。かかる女性は、現在は勿論永遠にどこの国でも理想とする婦人である。式部はこれを仏教から学んだと思う。観世音菩薩を想像して描いたのではあるまいか。優美と崇高の一致した人間像である。ここの品定めは主として女性批判であるが、同時にその女性を生んだ宮廷貴族社会の批判でもある。これは源氏物語全篇に対する論理でもある。この批判力は漢学や佛教から学得したのである。源氏物語は「もののあはれ」を書いた主情的な作品だとした宣長の

考えは潔癖である。この説を外来思想から文芸を独立させた名論として信奉している学徒は、文芸の根本に堅固な世界観のあるべきことをさとらず、感情さえあれば文芸は作られるものと幼稚に考えているのである。

これを要するに、仏教殊に浄土教は、ドイツの近代ローマン主義的美学よりも高度のもの、アインシュタインが、「宗教的宇宙感情」というが如き、ローマン的美を有っている。又現実を観る眼も極めて精密である。この相矛盾する両方を調和するが故に、源氏物語は大古典である。**もののあはれ**ということばは、浄土教様式を象徴している。

注　①　源氏物語の仏教思想

②　岩波・日本古典文学大系・和漢朗詠集・解題